

英知が深化する秋

甲州路を染める紫の四季彩、換気のため開放された車窓から流れ込む葡萄の芳醇な香り。故郷には都会で感じることの少ない豊穡の秋が訪れている。

彼女は車窓に広がる葡萄畑の風景に安堵を覚えつつ、手元の小説のページをめくる。三密を避け、お盆から約一か月遅れの帰省となった。十八歳で上京し、現在は在京一部上場企業に勤務している。実家は山梨県甲府市、ワイナリーを営む。

二〇二〇年。新型コロナウイルスが瞬く間に世界中に拡がり猛威をふるう。ここ日本でも日に日に増していく感染者数、死者数に皆が不安を抱いている。今年三月には全国公立学校での休校措置、四月、五月には緊急事態宣言が出され、不要不急の外出の制限、店舗の営業時間短縮、在宅勤務の推奨など、経済活動にも打撃を与える。

そんな中入社五年目の彼女は、コロナ禍による巣ごもり需要を目論み、イタリアからインテリア商品を買って付ける。



※演出上マスクの着用はしていません。

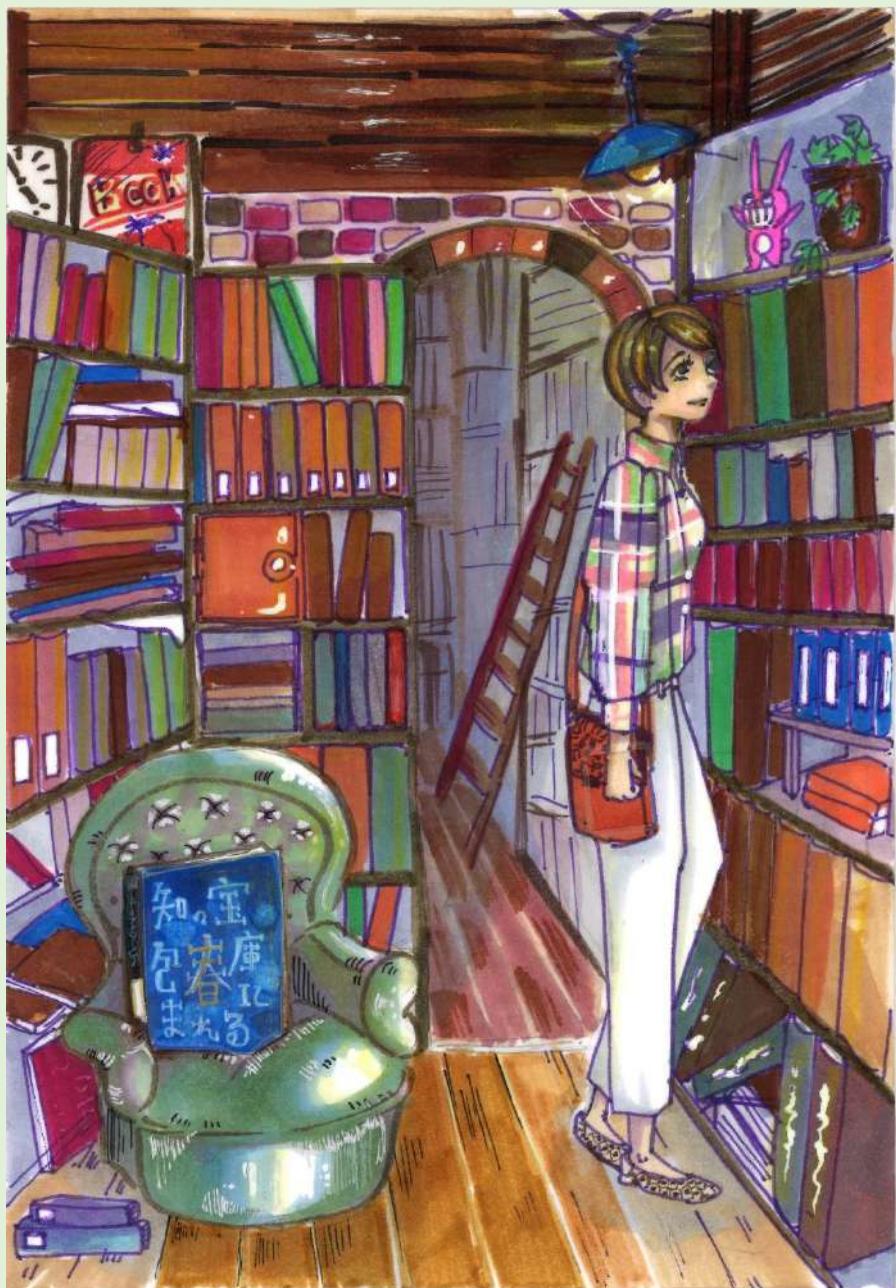
知の宝庫に包まれる春

初めて任された大きな仕事だったが、彼女が買い付けた商品はまったく売れなかった。失敗に意気消沈する彼女は、何とかその対応を終え、連休を取って故郷山梨へと向かった。

長かった髪をバツサリ切り、癒しを求め、地元の古書店を訪ねる。そこは幼い頃より父親に手を引かれて通っていた小さな古屋さん。在京大学進学以来久しぶりの来店だったが、店内は今も昔と何も変わらない。彼女は片隅にある深緑色の大きなアンティークソファーを見つけた。子どもの頃、その上でピョンピョン飛びはね遊んでいたお気に入りのソファード。店主はそれをいつも笑って許してくれていた。

奥から店主が出てきた。皺は刻まれたものの、今も変わらず温かく優しい笑顔で迎えてくれた。彼女は、懐かしさとともに張りつめていた様々な思いがこみ上げ、あふれ出る涙をおさえることができなかった。

物語に出てくるPOPに描かれたソファーには後日談があり、当時リラの円換算を1桁間違え、店主はクレジットの請求額に青ざめたそうです。



人生をマンキツする秋

原点に立ち帰り、癒しとパワーをもらった彼女は、東京へ

”再出発“を決意する。もう一度挑んだイタリア製家具の買い付けは、アンティーク調の一点もの感がうけ大きく売上を伸ばした。社内でも自分をようやく認めてもらえた気がして、充実した毎日を過ごす。

とある週末、朝早く目覚めた彼女が窓を開けると、世界中の晴れをぜんぶ東京にもってきたような秋晴れが広がる。意気揚々と愛車に乗り込みドライブへと出かけた。

横浜まで足をのばしゴルフ場へ。一時は日本女子プロゴルフ協会からプロにならないかと声もかかったほどの腕前だ。澄みわたった秋空に天高くボールを打つ。

横浜をあとにした彼女は東京に戻り喫茶店に立ち寄る。近年コーヒー激戦区といわれる清澄白河などには目もくれず、在学大学在学中から通いなれた古書街の、路地裏にひっそりと佇むお気に入りの喫茶店へと向かう。カウンターに腰かけ、深緑のゴルフバッグを隣の椅子にたて掛ける。仲良しのマスターと、大学時代に専攻していたヨーロッパ文学や、イタリアの諸事、ゴルフやクラシックカー談義で盛り上がり、時間の経つのも忘れ楽しい時を過ごした。



喫茶店を出て、彼女はまた運転席に乗り込む。その赤い車は、大学時代就職内定の祝いにマスターから譲り受けた、一九六五年製アルファロメオ・ジュリアスパイダーだ。五年間彼女とともに走り抜けてきた。夕暮れの赤く染まる東京の街中で、天窓を開け秋の風に髪をなびかせる。

一人暮らしの自宅アパートに帰り、彼女は書棚から一冊の本を選んだ。

——秋の夜長に、お気に入りのソファでダンテを読もう。